

2026年度 第5回（10月）北辰テスト対策 予想問題【C版】 解答・解説

国語

1 問1（4点）

イ

①の直前「ご飯の上に焼いた卵がのっているだけだった」に注目。

- ・見た目の粗末な弁当を友人に見られたくないという、恥ずかしさから隠した → イ。
- ・ア「食べたくない」は本文にない。ウ「父への感謝」は①の時点では読み取れない。エ「独り占め」は誤り。

1 問2（4点）

ウ

②の直前「おひたしは、母がよく作っていたものだった」「味は母のものとは違ったけれど」に注目。

- ・母の料理を父が作ろうとしていることに気づき、母のことや父の気持ちを思って、心を動かされている → ウ。
- ・ア「まずくて」は本文と合わない。イ「疑い」、エ「母に会いたい一心」は描写の中心ではない。

1 問3（6点）

(例) 母の助けを受けながら弁当を作る父の努力を、そっと見守っていたい (31字)

正答例:

- ・(例1) 母の助けを受けながら弁当を作る父の努力を、そっと見守っていたい (31字)
- ・(例2) 母の付箋を頼りに努力する父を、知らないふりをして大切にしたい (30字)

③の直前でノートの中身（父の記録と母の付箋）を知り、直後で「そっと」戻している。「気づいたことを父に言わず、その努力を見守る」という心情。

採点: 指定語2語（各1点）、「父の努力（父が弁当作りを学んでいる）」（2点）、「そっと見守る／黙っておく」（2点）。

1 問4（4点）

ア

④の直前「『おいしかった。』」「父は箸を持ったまま、少しの間動かなかった」に注目。

- ・これまで「ふつう」としか言われなかった弁当を初めて「おいしかった」と言われ、うれしさをかみしめている → ア。
- ・イ「疑っている」、ウ「不機嫌」、エ「聞き取れなかった」は場面と合わない。

1 問5（5点）

エ

⑤の直後「母のではなく、父のが」と、「明日は、何がいい」という父の初めての問いかけに注目。

- ・母の味と比べるのではなく、自分のために努力してくれた父の弁当そのものを受け入れている → エ。
- ・ア「母より上手」は本文にない。イ「母への不満」は誤り。ウ「食べ飽きた」は逆。

1 問6 (5点)

ウ・エ

- ・ア: 「今日の弁当、どうだった。」「そうか」がくり返され、最後に「いつもとは違う声」で変化が示される → 適切
 - ・イ: 「ふつう」→「おいしかった」の変化で「私」の心の変化が表されている → 適切
 - ・ウ: 母は入院中で登場せず、会話も描かれていない → 不適切
 - ・エ: 本文は「私」の視点であり、父の心情は「箸を持ったまま動かなかった」など様子から読み取る形 → 不適切
 - ・オ: ノートと付箋が、父と母の见えないつながりを示す小道具になっている → 適切
- 完答で5点。

2 問1(1) (2点)

うなが

促す＝うながす。相手にそうするように働きかける。

採点ポイント: 送りがな「す」を除いた「うなが」。「そく」と音読みしない。

2 問1(2) (2点)

なぐさ

慰める＝なぐさめる。

採点ポイント: 「慰」の訓読み。「い」は音読み。

2 問1(3) (2点)

過程

過程＝物事が進んでいく道すじ。「課程」(学習の内容や順序)との書き分けに注意。

採点ポイント: 文脈が「実験の道すじ」なので「過程」。

2 問1(4) (2点)

尋

尋ねる＝聞く、問う。「訪ねる」(訪問する)との書き分けに注意。

採点ポイント: 「道を聞く」の意味なので「尋」。

2 問2(1) (2点)

エ

「広告」の「広」。

- ・ア 「効果」(効)、イ 「工事」(工)、ウ 「校歌」(校)、エ 「廣大」(広)。

2 問2(2) (2点)

イ

「相違」の「相」。

- ・ア 「創作」(創)、イ 「相談」(相)、ウ 「送別」(送)、エ 「想像」(想)。

2 問3 (3点)

ア・ウ・カ

「れる・られる」の四つの意味を、文脈で判別する。

- ・ア 「先生に呼ばれ」＝先生から動作を受ける → **受け身** ✓
- ・イ 「思い出される」＝自然にそうなる → 自発
- ・ウ 「文集に載せられる」＝載せるという動作を受ける → **受け身** ✓
- ・エ 「校長先生も読まれた」＝校長先生への敬意 → 尊敬
- ・オ 「言葉が出られなかった」＝出ることができない → 可能
- ・カ 「人前でも読まれる」＝人に読まれる → **受け身** ✓

完答で3点。「～に…される」と言いかえられるのが受け身の目印。

2 問4 (3点)

ウ

助動詞の「ない」は、動詞につき、「ぬ」に言いかえられる。

- ・ア 「時間がない」＝「存在しない」の意味の**形容詞**（「ぬ」に言いかえられない）。
- ・イ 「少ない」＝形容詞「少ない」の一部。
- ・ウ 「走らない」→「走らぬ」と言いかえられる → **助動詞** ✓
- ・エ 「危なくない」＝形容詞「危ない」につく**補助形容詞**（「ぬ」に言いかえられない）。

採点ポイント：「ぬ」への言いかえと、直前が動詞かどうかで見分ける。

2 問5 (3点)

ウ

ことわざの空欄補充。

- ・「案ずるより産むがやすし」＝あれこれ心配するより、実際にやってみると意外に簡単だ ✓
- ・ア「石橋をたたいて渡る」＝用心深い（逆の意味）、イ「急がば回れ」＝安全な方法をとるほうがよい、エ「猿も木から落ちる」＝名人でも失敗する。

採点ポイント：文脈「まずやってみる」に合うものを選ぶ。

2 問6(1) (3点)

イ

空欄Ⅰの前後：友人に「最後まで聞いてもらえない気がする」と言われた場面で、その後「相手が話し終わるまで口をはさまないようにした」と行動を改めている。

- ・自分のくせに気づかされ、反省した → イ「はっとしました」。
- ・ア「うれしく」、エ「安心」は場面に合わない。ウ「腹が立ち」だと行動を改める流れにつながらない。

2 問6(2) (2点)

ア

原稿は「結論（大切にしていること）→ きっかけとなった体験 → 体験から得た気づき → 聞き手への呼びかけ」の順になっている → ア。

- ・イ「複数の体験を比較」、ウ「統計」、エ「結論を最後まで言わない」は原稿と合わない。

2 問6(3) (2点)

エ

空欄Ⅱは、聞き手への呼びかけの結びで、「相手の言葉を最後まで受け止める」ことで得られることを述べる部分。

- ・原稿の第三段落「相手の話の中に、自分が思いつかなかった考えがたくさんあることに気づいた」を受けて → エ。
- ・アは「自分の意見を言う」ことで逆。イ・ウは原稿の内容とつながらない。

3 問1 (4点)

ウ

①の直後「間違いなく便利であり、私自身、毎日その恩恵を受けている」と、第二段落「しかし…静かに失われているものがある」の両方をふまえる。

- ・便利さを認めつつ、失われるものにも目を向けている → ウ。
- ・アは便利さだけ、イは否定だけで、どちらも一面的。エ「使いこなせない」は本文にない。

3 問2 (4点)

ア

山道の体験の段落「立ち止まり、耳をすまし、空を見上げた」「木々の形や、沢の音の方向は、今でもはっきりと覚えている」が根拠。

- ・迷ったことで自分の感覚を使い、その場所を深く記憶した → ア。
- ・イ「地図を読む技術」、ウ「父との関係」、エ「危険」は本文の論点ではない。

3 問3 (6点)

(例) 答えだけを受け取り続け、考える過程を飛ばしていると考える力が弱まる (33字)

正答例:

- ・(例1) 答えだけを受け取り続け、考える過程を飛ばしていると考える力が弱まる (33字)
- ・(例2) 過程を飛ばして答えだけを得ていると、自分で考える力がおとろえていく (33字)

③のある段落「過程の中にこそ、観察し、比べ、考えるという営みがある。答えだけを受け取り続けていると」が根拠。「筋肉が細くなる」＝使わないことで力がおとろえる、という比喻。

採点: 指定語2語 (各1点)、「答えだけを受け取る／過程を飛ばす」(2点)、「考える力がおとろえる」(2点)。

3 問4 (4点)

エ

④の直後「わからないという状態は、不便であると同時に、人が最も考える瞬間でもあるからだ」が理由。

- ・「わからない」状態こそ人が考える瞬間なので、それを全部なくすと考える機会が失われる → エ。
- ・ア「技術の進歩を止める」は本文と逆。イ「道具が壊れる」、ウ「不便を楽しむ」は本文にない。

3 問5 (5点)

イ

「適切でないもの」を選ぶ。

- ・ア: 冒頭で道具の便利さを認め、「しかし」で失われるものに話を転じている → 適切
- ・イ: 山道の体験は筆者自身の体験であり、「専門家の意見」ではない → **不適切**
- ・ウ: 「考える筋肉が細くなる」という比喻で、考える力のおとろえをわかりやすく表している → 適切
- ・エ: 「誤解のないように言えば、私は便利な道具を捨てよと言いたいのではない」と、主張の範囲を限定している → 適切

3 問6 (5点)

ウ

最終段落「便利な道具と、考える力。この二つは対立するものではない。道具に頼りながらも、ときどき立ち止まって、自分の頭で迷ってみる。そういう使い方ができる人こそが、道具を本当に使いこなしている」が主張。

- ・ウ が最も近い。
- ・ア は「道具を使わない」で言い過ぎ。イ は本文と逆。エ は「道具に任せてよい」で逆。

4 問1 (4点)

むかう

「向かふ」の「ふ」は語頭以外のハ行なので、現代仮名遣いでは「う」に直す。

- ・向 (む) かふ → **むかう**

採点ポイント: 「むかふ」のままにしない。「向」をひらがなで書く。

4 問2 (4点)

イ

①の直後「これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を向かふべからず」が誓いの内容。

- ・射損じたら弓を折って自害し、二度と人前に出ない、という覚悟 → イ。
- ・ア「都に戻る」、ウ「褒美」、エ「もう一度射させて」は本文と合わない。

4 問3 (4点)

(例) 風が弱まり、扇が射やすくなっていた (17字)

正答例:

- ・(例1) 風が弱まり、扇が射やすくなっていた (17字)
- ・(例2) 風が少し弱まって扇が射やすくなった (20字)

本文「風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける」(射よげ=射やすそう) が根拠。冒頭で「北風激しくて」「扇もくしに定まらず」とあった状況が変わったことを書く。

採点: 「風が弱まった」(2点) + 「扇が射やすくなった」(2点)。字数外は0点。

4 問4 (4点)

ウ

③は、与一の見事な射芸に、敵味方の区別なく感嘆した場面。

- ・平家は敵だが、風と波の中で小さな扇の要を射切った技の見事さそのものに感動した → ウ。
- ・ア「勝負をあきらめた」、イ「味方だった」、エ「扇が海に落ちてほっとした」は本文と合わない。
- ・敵味方をこえて武芸をたたえる場面は、『平家物語』の名場面として有名。